

平成三十一年度

# 小論文

(90分)

短期大学部 幼児保育学科

解答はすべて解答用紙に記入すること

## 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開かないこと。
- 二、問題用紙は、表紙を含めて三ページである。
- 三、解答用紙は、二枚である。二枚とも解答すること。
- 四、受験番号・氏名は、監督者の指示に従って記入すること。
- 五、問題用紙の余白等は適宜使用してよい。

## 問題

### 短期大学部 幼児保育学科

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

本を読んでいて次の言葉に出会いました。

人は極端になにかをやれば、必ず好きになるという性質をもっています。好きにならぬのがむしろ不思議です。好きでやるのじゃない、ただ試験目当てに勉強するというような仕方は、人本来の道じゃないから、むしろそのほうがむしろむずかしい。

(小林秀雄・岡潔『人間の建設』新潮文庫)

勉強というと試験のために無理をして取り組まないといけないニュアンスがありますが、本当の学び(学問)は面白くてやめられないものだ。そのような趣旨のことを数学者岡潔は評論家小林秀雄との対談で述べています。注目すべきは、「好き」の前に「行動」がある、という指摘です。普通は、「好き」だから「行動」するのだと考え、子どもに対して「好きなことをしたらいいんだよ」というメッセージを伝えたりします。これは物わりのよい大人の言葉に聞こえますが、結果的に子どもの行動をせざるべきことになります。

子どもは「好きだからやる」という発想をしません。面白そうだからまずやってみる。その結果、面白くなければやらない。子どもの行動はこの連続です。森のなかに連れていくと、目につくものに手当たり次第ふれ、いろいろなこと<sup>①</sup>に「ちようせん<sup>①</sup>」するのが子どもです。そして、本当に面白と思ったことは時間を忘れて没入する。そして結果的に自分の「好き」なことを見つけていくのです。

一人遊び、複数遊びは問いません。自分(たち)でルールを決め、自分(たち)でそれを守り、行動に移す。その結果を踏まえ、もっと面白い遊び方はないか、自問自答し(相談し)ルールを変えながら、別の遊びを作り出す。子どもの遊びとは、こうした全身全霊を使った試行錯誤のプロセスであり、それを通じて人生を能動的に生きる基本的態度を養っていくのです。

子どもが将来自分の行動に責任をもち、自分の選択に胸を張って生きるには、このような「ひたる」経験、すなわち「遊び」と呼ばれる没入体験が大事な鍵を握ります。それは、一人一人の子どもが心のなかで「よし、やるう」と思ってから始める主体的行為であり、周囲の大人に「これをやりなさい」と言われて行う受け身の行為ではありません。

私たち大人はそんな子どもたちのために何をすればよいのでしょうか。答えは「黙って見守ること」です。たとえば、学校の図書室と子どもの関係を考えてみましょう。図書室を利用したことのない子どもに向かつて、いきなり「好きな本を読めばいいよ」と言っても意味がありません。その子にとっては森と同様、図書室の存在そのものがワンダーランドです。手当たり次第に本を読みあさるなかで、徐々に自分の好きな本の傾向がつかめるでしょう。その結果、大人が何も言わなくても、子どもはひとりだけで好きな本を何回も読むでしょうし、気に入った作家の作品をすべて読み尽くすこともあるでしょう。

大人が最も心を砕くべきことは、子どもが「極端に何かができる」(何かにひたることのできる)環境を用意し、本人の自由な行動を保証することです。読書の話の続きで言えば、まずは大人が子どもを図書室に連れていくことが第一歩ですが、「あの本はだめ、この本はいい」などと口出しせず、子どもの自由な選択に任せること

が大切です。子どもが本を選ぼうと親の意向を気にするようでは、本の世界に百パーセント「没入」できません。結果的に本への関心も薄れていくでしょう。

幼児期にとことん遊んだ子どもは、学校での「学び」にもしっかり取り組めるはずです。本来の「学び」は、「遊び」と根っこでつながっているからです。子どもが学校で生き生きと「学ぶ」には、幼児の「遊び」と同様、大人は子どもを「黙って見守る」のがベストです。

こう言うと、「子どもは厳しく言わないと勉強しない」という反論が返ってくるでしょう。この場合の「勉強」は「学び」ではなく「義務」の別名であり、楽しいものではありません。親は「勉強なさい」と口酸っぱく言い、子どもは勉強するのが嫌になって従わない。こうして親子ともにひへいするパターンはよくあります。残念ながら、日本の教育では入試に合格するための「勉強」が<sup>③</sup>しょうれい<sup>②</sup>され、「学び」を尊重する空気が希薄です。この点は残念に思いますが、現実がそうである以上、合わせる必要も出てきます。ではどうすればよいのでしょうか。

私は、義務として取り組む「勉強」についても、親が黙って見守るかぎり、子どもは自分のやり方で「遊ぶ」工夫して学ぶことができると思っています。たとえば試験でよい点を取るには何をどうしたらうまくいくか？ これをとことん考え、工夫し、実践する。うまくいっても、いかなくても、常に試行錯誤して結果を検証して先に進んでいく。たとえば授業中に黒板通りに写さず、一問一答形式にしてノートを取る。同じやり方をする友達と休み時間に問題を出しあう。勉強を広い意味での「遊び」に<sup>④</sup>てんかん<sup>④</sup>してしまえばいいのです。

子ども時代に「遊び」という没入体験を思う存分経験すれば、おのずと学校の勉強も楽しめるし、生涯にわたって「学び」の体験ともつきあえます。大人になって「好きなこと」を「仕事」にするもよし、義務としての「仕事」を「好き」に変える工夫をこらすもよし。子ども時代に「遊び」を通じて育んだ「好き」の気持ちを生涯もち続けることで、人生が豊かになることは間違いありません。

繰り返しになりますが、子どもの自信に満ちた行動の鍵を握るのが、親の「黙って見守る」姿勢にあります。「黙って見守る」とは、「勝手に遊んでおきなさい」と放っておくことではありません。遊びに没入する子どもの姿を見て、この経験こそ人生体験のもっとも貴重なものであると思えるなら、それで十分です。親にそのようなまなざしで見守ってもらえた子どもたちは、生涯「遊び」の魂を輝かせ、勉強にも仕事にも前向きに取り組むことができると思います。子どもの「遊び」を通じて、実は親自身が自分の人生観、価値観を問われているのです。

出典 山下太郎著『お山の幼稚園で育つ』

第11章 ひたる——没入体験の原点は幼児期の遊び（世界思想社・2018年）

設問一 傍線部①～④のひらがなを適切な漢字に直しなさい。

設問二 筆者が述べている大人による子どもの没入体験のきっかけづくりの具体例を、本文中の言葉を用いて一五字以上二〇字以内で答えなさい。

設問三 筆者は、「ひたる」子どもに対して、大人はどのような接し方をすべきと述べていますか。最もふさわしい言葉を本文中から三文字で抜き出さなさい。

設問四 本文を読んで、あなたの考えを六〇〇字～八〇〇字以内でまとめなさい。